

2022年5月22日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「十字架の言葉は“神の力”」

聖書：コリントの信徒への手紙一1:18～25

キリストは何故十字架にはりつけにされたのか？神の子が十字架上で苦しまれたのは何故だったのか？そこには二つの意味があるように思う。一つは、ヨハネ福音書に「神は、その独り子をお与えになったほどに世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。…」(3:16-17)他、ヨハネの手紙一4章。キリストは私たちに「愛」を示すために「十字架」にはりつけにされたと言う神の愛のゆえにというもの。命を投げ出すほどの「愛」。ただここには、神の「強さ」「勇ましさ」が見え隠れし、ともするとその「強さ」「勇ましさ」だけを神そのものと思いがちになる。

もう一つは、パウロは自らの経験でこう語る。「…わたしの身に一つのとげが与えられました。それは、思い上がらないように、わたしを痛めつけるために、サタンから送られた使いです。この使いについて、離れ去らせてくださるよう、わたしは三度、主に願いました。すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。…」(Ⅱコリント 12:7～)弱さの中にこそ、神が宿られるとパウロは語る。また、マタイ福音書「はつきり言っておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」(25:40)。

イエス・キリストの十字架には、私たちへの究極の愛を表し、私たちが歩むべき道が示されている。神に愛されているということの喜びに生き、弱くさせられている側への視座を覚え、そこに立つことの重要さを、十字架の言葉から教えられたい。

先日、沖縄は「復帰」50年を迎えた。50年前、沖縄は何故「日本復帰」を選択したのか？…というより選択をせざるを得なかった、他に選択の余地がなかったことが大きいのだろう。戦後の日本国憲法のもとに、平和憲法(九条)のもとに行くことが、沖縄に安全の保障、人権の保障、人間が人間らしく生きることの保障が得られるからだとして沖縄は判断したからだろう。しかしこの50年、沖縄が望んでいた「保障」が得られているとは言い難い。沖縄がこれでもかとヤマトウから、米国から小さくされ続けている。

キリストの十字架の言葉は、この沖縄の現状に慰めと励まし、希望と勇気へと導くことを、このところから感じ取って行きたい。「十字架の言葉は“神の力”」そのものだ。(神谷)